



## エレナ・トレス : メキシコ革命期のフェミニスト 教育家の軌跡

著者	松久 玲子
雑誌名	言語文化
巻	10
号	1
ページ	121-140
発行年	2007-08-25
権利	同志社大学言語文化学会
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000011158">http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000011158</a>

# エレナ・トレス ——メキシコ革命期のフェミニスト教育家の軌跡——

松久玲子

## はじめに

1876年から1910年までのポルフィリオ・ディアス独裁政権時代に、メキシコの近代教育制度の基盤が作られ、1910年から1940年にいたる広義のメキシコ革命期<sup>1</sup>に都市から農村まで近代的公教育制度の普及が試みられた。この時期に公教育においても次第に女子教育が重視され、公教育カリキュラムの中に女子が学習すべき内容が定式化されていった。公立学校の教育内容におけるジェンダーによる差異化、つまり教育のジェンダー化が形成され始めたのは、19世紀末から20世紀前半においてだった。その過程で、それまで教育において無視されていた農村地域の女性たちを対象として、公教育において近代国家にふさわしいジェンダー規範を浸透させようとしたと考えられる。

メキシコ革命期には、多くの女性たちが教員として、また、教育官吏として教育を通じた国民国家の形成に参加した。この頃興隆した第一波フェミニズム運動は、1930年代前半の女性の選挙権獲得運動に収斂していったが、その前段階として女子が教育を受ける権利と機会の拡大を要求した。近代公教育の形成においてフェミニズム運動がどのように女子教育とその概念の形成に影響を及ぼしていったかを考える時、フェミニストであり、教師として、また教育官吏として農村教育に貢献したエレナ・トレス＝クエジャール（Elena Torres Cuellar）の軌跡をたどることは、国民国家形成期のフェミニズム運動と国家の関係を知る上で重要な手がかりとなろう。当時のフェミニストたちは、革命という社会変革の中で教育に携わることにより、社会における女性の役割を変化させ、女性の新しい役割を構築しようとした。メキシコ

革命において教育を通じて社会変革に取り組んだエレナ・トレスの生涯をたどり、当時を代表するフェミニストが国民国家形成にどのように参入したかを明らかにする。後年、エレナ・トレスは、農村教育に大きな足跡を残すが、その業績の分析は農村教育のジェンダー化を考察する上で不可欠であろう。今後の課題としたい。

## 1. エレナ・トレスに関する先行研究

メキシコの女性史に登場するフェミニストたちは、エルミラ・ガリンド (Hermila Galindo)<sup>2</sup>やエルビア・カリージョ＝プエルト (Elvia Carrillo Puerto)<sup>3</sup>のようにフェミニズム運動への華々しい登場にもかかわらず、数年で突然歴史の舞台から去り、書き残されたものが少ないために、その思想や一生をたどることが大変難しい。それに比べると、エレナ・トレスは教育官吏としての実績が残っているために、その生涯を跡付けることは比較的容易である。フェミニスト名鑑<sup>4</sup>によれば、1893年6月23日、グアナファト州エルミネラルデメジャードに生まれ1970年没、教師、フェミニスト、独身、学士と紹介されている。エレナ・トレスは、教師として働きながらフェミニズム運動にかかわり、ユカタン州で開催されたメキシコ初のフェミニズム会議に参加し、汎アメリカ大陸女性同盟フェミニズム会議の議長を務め、女性の労働運動にも関わってきた。また、公教育省で文化伝道団の創設に加わり、農村教育の普及とともに農村女性の家政科教育に貢献した。このフェミニスト名鑑の記述は、ノエミ・コルテス＝ラミレス論文に基づくものである<sup>5</sup>。メキシコのイベロアメリカ大学資料館 (Archivo Histórico de la Universidad Iberoamérica AHUIA内の Archivo Personal de Elena Torres) には、5箱に上る67の関連文書、4冊の本からなる1912年から1948年までのエレナ・トレスの記録が親戚から寄贈されて収められている。ラミレス論文は、未整理のこれらの資料を調査しながら、エレナ・トレスの生涯を教員および公教育省での活動に重点を置いて、記述している。メキシコで初めて開催されたユカタン州のフェミニスト会議への参加、汎アメリカ大陸女性同盟のボルティモア会議、メキシコ会議での活動など、フェミニストとしてのエレナ・トレスの活動にも言及しているが、フェミニストとしてのエレナ・トレスの教育姿勢そしてジェンダー

観の分析は行われていない。また、公教育省資料館（Archivo Histórico de la Secretaría de Educación Pública, AHSEP）には、公教育省が設立された1921年に、エレナ・トレスが家政学師範学校教師に任命されて以降1955年までの辞令が保管されている。エレナ・トレスの名は、メキシコのフェミニズム運動史に登場するが<sup>36</sup>、特にフェミニストとしてのエレナ・トレスの立場を分析した先行研究は見当たらない。

これらの先行研究および資料に基づき考察すると、エレナ・トレスの生涯は公教育省の設立を挟んで大きく2つの時期に分けられる。前半は、さらに2つの時期に分けられる。狭義のメキシコ革命が終わるまでのグアナファト州での時期とメキシコ革命後の世界労働者の家に参加し教師としてユカタンの労働運動に参加したユカタンでの時期である。後半は、1921年に公教育省が設立され、エレナ・トレスがその活動の中心をメキシコ市に移し、教育官吏として国家再建に加わった時期である。公教育相バスコンセロスの下で農村に文化伝道団を設立するが、1928年から30年の間、大統領選に巻き込まれたために職を辞し、アメリカ合衆国に亡命した。その後、合衆国から帰国して、再び官吏としての生活を再開し1970年に亡くなった。

本研究ノートでは、エレナ・トレスの生涯をフェミニズム運動と関係付けながらとどろ、フェミニストとしてのエレナ・トレスの女子教育観を考察する手がかりとしたい。

## 2. グアナファト時代

フェミニスト名鑑によれば、エレナ・トレス＝クエジャールは、1893年6月23日、グアナファト州でメセドニオ・トレスとフレナシスカ・クエジャールを父母として、貧しい家庭に生まれた。メキシコの古い鉱山都市であるグアナファトの公立小学校を卒業し、その後、会計とタイプの個人授業を受けた。1907年、14歳のときから「アメリカ商会」（Negociaciones americanas）に会計係として働き、貧しい境遇の娘たちのためにグアナファト州立学校の教師たちが組織した夜間クラスで学んだ。この夜間クラスでは、スペイン語、演劇、スペイン・メキシコ文学を学ぶとともに、衛生、応急処置の授業を受け、鉱山病院でも働いた。16歳で、グアナファト新聞に「家庭外で働く女性の価値」

という記事を投稿している。エレナ・トレスの家族は貧しいと記述されているが、その家族が属した社会階層は、富裕層ではないが、当時の大多数が属したペオンと呼ばれた農奴同然の最下層でもない、その中間の階層だった。1900年のグアナファト州12歳以上の成人人口中識字者は16.6%<sup>7</sup>、初等教育の推定就学者率19.05%<sup>8</sup>という数字を考えると、エレナ・トレスの家庭は少なくとも子どもに小学校教育をあたえられる層だった。しかし、中等教育を授ける経済的余裕はなかったらしく、生計を立てるためには娘が働かなければならなかった。ポルフィリオ・ディアス期の経済成長の中で、新興しつつある中間層の下層部に属していたと考えられる。1900年当時、グアナファト州では女子師範学校がひとつあり、女子中等教育を担う唯一の公立学校だったが、メキシコでは、女子師範学校、女子実業学校の教師や生徒を中心としてフェミニズム運動が形成されつつあった。エレナ・トレスは働きながら夜間学校で実業教育を受ける間に、フェミニズム運動や社会運動の影響を受けたと推測できる。事実、エレナ・トレスは、ポルフィリオ・ディアスに対する反再選運動に参加し、「グアナファト人」(Guanajuatense)、「すみれ」(Violeta)などのペンネームで反独裁政権の記事を『フェレルの声』(La Voz de Ferrer)に投稿した。1912年に師範学校を卒業していない教員を対象とした州の資格試験に合格し、同年6月に19歳で、グアナファト州のサンタアナ鉱山第3種学校の校長となった。さらに、すぐ後に、シラオの女子高等小学校(escuela superior de niñas)教師となった。また、「世界労働者の家」の学校で教師として働くと同時に、政党本部の速記者となった。

メキシコ革命前には、労働者を中心として「世界労働者の家」の労働運動が、ソノラ、タマウリバ、シナロア、グアナファト州に広がっていた。「世界労働者の家」の運動は、ディアス政権期に形成された中間層の教師たちによる革新的な合理主義学校運動と密接な関係をもちながら展開された。この合理主義学校は、スペインから影響を受けて開始された。1908年にスペインのバルセロナでフェレル＝グアルディア(Francisco Ferrer Guardia)が教条主義から自由で、科学に立脚した「近代学校」(Escuela Moderna)を設立した。ここで教えられた合理主義教育の目的は、新しい人間を形成することで、自然と社会に関する科学的知識と合理性を教え、社会的不正義と戦うためにその

起源を知り、プロレタリアートの解放を目的としていた。フェレルはアルフォンソ13世を襲撃した罪で捕らえられ、スペインの近代学校の運動は終わったが、カタルニア人のフェレス（Amadeo Ferrés）とスペイン人の教師モンカレアノ（Francisco Moncaleano）がメキシコに合理主義教育をもたらした<sup>9</sup>。フェレスは労働組合主義の創始者で、ソノラ、タマウリパ、シナロア、グアナファト州を中心に機関紙を発行し、1912年にメキシコに「世界労働者の家」を設立した。「世界労働者の家」には運輸関係の労働者や製造業に雇用されている人々、サービス関係の労働者、学生、インテリなどが集い、革命の中で当初は護憲派<sup>10</sup>のカランサに協力した。ユカタン州では、「世界労働者の家」は、カランサにより任命された州知事のアルバラドにより1915年に設立された。また、フェレルの熱心な信奉者であった公立学校教師のホセ・テラルス＝メナ（José de la Luz Mena）が、他の教員たちとともに「世界労働者の家」設立以前からも、ユカタン州で合理主義教育を実施していた。メキシコの合理主義学校は、純粋理性や進化論に基盤を置きカトリックのくびきから教育を解放しようとした。合理主義学校の教育は実践的で、職業教育と結びつき、学校は調理室、遊戯室、音楽室、図工室、さらに写真室やタイプ室が備えられ、カリキュラムにしたがって教育するのではなく、児童の興味を中心に展開されることを理想とした。その教育は、デューイの教育論やオーウエンの社会主義を視野に入れ、新しい教育的潮流を取り入れようとしたものだった。

当時、22歳だったエレナ・トレスは、「世界労働者の家」の活動を通じて、エルミラ・ガリンドやアルバラドなどの護憲派の人々と親交をもった。

## 2. ユカタンでの政治・教育活動

22歳のとき、エレナ・トレスは、1916年に開催された2回のフェミニズム会議に参加した。また、2回のフェミニズム会議の間の5月からグアナファト労働学校の教師となった。1916年1月13日から16日までの3日間、ユカタン州の州都メリダで第一回フェミニズム会議が開催された。この会議は、アルバラドの4つの諮問に対して答申するために召集された会議で、参加資格は初等教育修了程度の知識を持つことが条件付けられた。会議には、617名の女性たちがメキシコ全土から参加したが、大部分が教員で正式な参加者に

対しては旅費、宿泊費が州政府から支給された<sup>11</sup>。同年の11月23日から12月2日まで開催された第二回フェミニズム会議では、第一回会議で物議をかもしたエルミラ・ガリンドが再度フェミニズム会議に向けて作成した演説をエレナ・トレスが代読している。2回の会議は、民法の改正や女性参政権の要求を掲げた革新的な内容を持つものだったが、女子教育に関してもカトリック教会の影響を排した合理主義学校を支持した決議を採択した。基本的には、男女の差異を前提とした本質主義を肯定し、家庭内で女性が産み育てる再生産機能を有効に果たす能力発展のための教育機会、家庭における再生産機能を向上させるために社会において発言権を得るための参政権、子どもを単独で育てることを余儀なくされた女性が家庭を維持できるような職業教育などが女子教育の提言にあげられた。この2回にわたるフェミニズム会議の記録<sup>12</sup>には、エレナ・トレスの名は見えない。しかし、その傑出した態度と意見が認められてアルバラドがユカタンに招聘し、1917年にメキシコ初のモンテッソーリ学校をメリダに設立した。1917年から19年の間、ユカタンで労働学校の設立やメリダの美術学校での教育など様々な教育活動に加わりながら、ユカタン社会党の黨員となり政治活動を行った。

1918年にモツルで開催されたユカタン社会党第一回大会にも参加し、女性解放プログラムの草案作成に加わった。モツルはカリージョ＝プエルトの出身地であり、合理主義学校を支持する多くの教師たちが活動していた。エルビア・カリージョ＝プエルトが社会主義フェミニスト抵抗同盟を設立し、農村やアシエンダをまわり農民女性を組織したのもこの時期である。エレナ・トレスは次第に社会党に接近し、護憲派からは距離を置くようになっていた。

1919年頃、カランサ大統領は経済危機に見舞われ、連邦政府が連邦区の教師の給与補助を打ち切ったのを契機に1919年5月12日に大規模な教師のストライキがあった。当時は、学校教員の過半数が女性であり、かつ女性教師は男性教師と比べ差別的な待遇を受けていた<sup>13</sup>。このストを契機に首都で女性教師が中心となる組織が形成された。6月にユカタン社会党は、首都圏のフェミニストと連携するためエレナ・トレスを派遣した。エレナ・トレスは、9月から10月に全国女性審議会（Consejo Nacional de Mujeres）の設立に参加し、第一書記に任命された。そして、会長のフアナ・グティエレス（Juana

B.Gutierrez) が会報をめぐる不始末から追放された後、エルヴィア・カリージョ＝プエルトとともにメキシコフェミニズム審議会（Consejo Feminista Mexicana）を設立し、会長となった。これは、メキシコ初のフェミニストによる政治組織だった。同年11月24日にメキシコ共産党が結成されると、共産党傘下のフェミニズム戦線となった。メキシコフェミニズム審議会の会員は、大部分が女性教員と女工で、女性のために図書館の開設や雑誌『女性』の刊行に携わった。エレナ・トレスは、メキシコ共産党の結成に加わり、その設立後は共産党の会計を担当し、共産党の機関誌『共産主義者』の発行にも関わっている。次第に首都圏での活動が多くなったが、その間、メキシコ大学で生物学を学び、栄養学や性現象、生物学への興味をもった。これが後に農村教育や家政科へ関心が向かう契機となった。

次にカランサ大統領を中心とするカランサ派とメキシコ北部出身者のオブレゴン、カジェスやデラウエルタらを中心とするソノラ派の対立が顕在化し、政変の中で、エレナ・トレスは首都に活動の場を移した。

### 3. バスコンセロスの教育運動への参加

1920年から1年間、エレナ・トレスは連邦秘密警察（Servicio Secreto de la Policía）で、秘密警察長官ガリド（José Domingo Ramírez Garrido）の秘書として働いていた。ガリドは、ユカタン州の教育局長で、カランサ体制に対して武力蜂起をしたひとりである。この武力蜂起はすぐに鎮圧されたが、後に、オブレゴン、カジェス、デラウエルタによる武力蜂起のきっかけとなり、カランサ大統領はデラウエルタのクーデターにより殺害された。カジェスは、ガリド懐柔策として、秘密警察長官職にガリドを任命したといわれている<sup>14</sup>。ユカタンでの教育活動を共にしていたガリドとエレナ・トレスは、警察の近代化を図るとともに、労働者の集會に警察のバンドを派遣して音楽を演奏させたり、ストへの警察の介入を禁じたり、女性組織のために働いていた女性たちを秘密警察に雇用した。秘密警察に職を得たことが、単に政変の中の偶然なのか、あるいはなんらかの思想的転向なのか、資料からは不明だが、この過程が連邦政府での活動への道を開いたことは確かであろう。

デラウエルタ暫定政権の下で実施された大統領選挙により、1920年12月1



日にオブレゴンが大統領となった。このオブレゴン政権の下で、国民統合をめざして教育制度の基盤整備が開始された。1921年に公教育省が設立され、メキシコ国立大学学長だったホセ・バスコンセロスが初代公教育相に就任した。バスコンセロスは、公教育を国民統合の手段として位置づけ、壁画運動<sup>15</sup>や先住民の国民国家への統合や農村教育に力を注いだ。教員の不足を補うため、バスコンセロスは名誉教師の制度を設立し識字運動を実施した。同時に、女性は精神的母性をもっているため、女性であるだけで男性よりも教師としてふさわしい能力を持っていると述べ、多くの女性を教師として識字運動に動員した。

27歳のエレナ・トレスは、1921年2月から5月にメキシコ国立大学の家政教育学校（Escuela de Enseñanza Doméstica）の教員となった。そして、1921年5月から1923年10月まで、学校朝食サービスを設立し、国立大学技術教育局所轄学校の嘱託視学官（Inspectora supernumeraria de comedores escolares de las Escuelas pertenecientes a la Dirección de Educación Técnica）として運営に当たっている。5月11日に辞令が発行され、日給として15ペソを支給された。当時、連邦区の小学校校長の日給は男性4.8ペソ、女性校長が3.84ペソであったことを考慮すれば破格の待遇だったといえよう<sup>16</sup>。学校給食は、メキシコ市の5箇所調理場を作り、一食15センターボでミルク入りコーヒー、小麦粉のトルティージャ2枚、フリホーレスが支給された。1921年から一日3000食、1923年までに一日10000食が供給された。

さらに、バスコンセロスは、農村教育普及のために文化伝道団を設立した。当時のメキシコの10歳以上の成人人口の65%が非識字だった。先住民の割合は16%を占め、スペイン語を話さない先住民は半分以上でそのほとんどが農村に居住しており、農村地域での非識字率は特に高かった。公教育制度の普及が遅れていた農村地域に、識字運動の一環として文化伝道団を派遣した。その目的は、文化伝道団による農村教師の研修、農村教師の養成、そして農村の生活向上だった。8週間の研修を受けて伝道団教師たちが、村々を回り約4週間滞在して教員養成を行った。文化伝道団は、初等教育視学官が団長となり、衛生、農業、民芸品作り、体育、家事、大工仕事、歌や絵の指導者、ソーシャルワーカーから構成された。文化伝道団の役割は、農村の生活向上

だけではなく、近代国家としての国民意識の形成も重要だった。

エレナ・トレスは、1923年7月から8月にかけて、実験的文化伝道団計画に携わった。1923年11月から10ヶ月間、モレロス州でエレナ・トレスが団長となり計画が実施された。そして、クアウトラで、夜間の自由農民学校を5ヶ月間運営した。1924年に、公教育省は、モレロス州で文化伝道団を展開するために、エレナ・トレスを伝道団教師に任命するが、彼女は、この職を辞退した。文化伝道団の団長には、ラファエル・ラミレス (Rafael Ramírez) が任命された。エレナ・トレスは後年の手記の中で、その理由を明らかにしてはいないが、文化伝道団創設者であるにもかかわらず、政治的理由から責任者になれなかったと述べている。また、この職は、日給9ペソで、労働条件は前職と比較すると満足の行くものではないことは容易に想像できる。

こうした公教育省での活動のかたわら、エレナ・トレスはメキシコのフェミニズム運動の代表として海外に派遣された。1922年にアメリカ合衆国のメリーランド州ボルティモアで汎アメリカ大陸女性同盟会議が開催され、エレナ・トレスはメキシコフェミニズム審議会の代表として、エウラリア・グスマン、ルス・ベラ、フリア・ナバ＝デルイサンチェスらとともに政府により派遣され参加した。4月20日に開催された部会のテーマは、児童福祉、教育、工業における女性、女性の人身売買、女性の市民権、女性の政治的権利、各国の傑出した女性、国際的連帯だった。この会議で、北米支部の副会長としてエレナ・トレスが選出された。メキシコ代表はメキシコフェミニズム審議会の活動と教育に重点をおいた報告を行った。その中で、エレナ・トレスは、学校朝食、女性の人身売買、ユカタンの活動について報告している。

1922年に、マルガリータ・ロブレス＝デメンドサにより、汎アメリカ大陸女性同盟のメキシコ支部が設立された。この組織は、アメリカ合衆国の参政権運動に影響を受けて設立された。1923年5月20日から30日にかけて汎アメリカ大陸女性同盟第一回フェミニズム会議メキシコ大会が開催された。議長は、エレナ・トレスが務めた。メキシコの20以上の州から代表が送られ、100名が参加した。他にも、アメリカ合衆国から様々な組織の代表が参加した。市民権、政治的権利、性の問題、産児調整、経済的問題、女性労働者の子どもの保護、女性の保護の7項目にわたり決議が出された<sup>18</sup>。市民権に関して

は、公職の被選挙権、離婚の権利を要求し、非宗教的な市民婚が示唆された。政治的権利については参政権の要求、性の問題については、公立学校での男女共学、男女によって異なる二重の倫理規範への非難、生物学、衛生、育児、生死を含む教育の公立学校への導入が決議された。

産児調整は、最も議論のあった部分だった。共にユカタン社会党で活動していたエルビア・カリージョ＝プエルトは、女性のセクシュアリティ、避妊、自由恋愛、学校での性教育を決議に入れる事を強く要求した。ユカタン州では、エレナ・トレスがメキシコ市に去った後、フェリペ・カリージョ＝プエルト知事（1922年－23年）の下で、急進的な改革が進んでいた。離婚法の成立、マーガレット・サンガーの避妊法を書いたパンフレットの配布、州レベルの女性参政権などがすでに実施されていた。これに対し、首都圏では有力日刊紙エスセルシオールを中心に、産児調整に反対する「母の日」を祝うキャンペーンが展開された。バスコンセロスはこのキャンペーンを支持し、「母の日」を学校行事に取り入れている。エルビア・カリージョ＝プエルトは、これらの問題を取り上げないなら会議をボイコットすると圧力をかけ、2日間がこの議論に当てられた。エルビア・カリージョ＝プエルトは、ユカタンで配布されたパンフレットを会場で配り、女性の身体管理と産児調整の必要を訴えたが、5月24日の全体会議では、産児調整は絶対多数で否決された。産児調整は産前産後のクリニックに、自由恋愛は結婚式の簡素化に置き換えられ、性教育は用語そのものが排除された。エレナ・トレスは、会議が紛糾する事を恐れ、調整に努めた。しかし、その立場は複雑だった。エレナ・トレスは、1925年3月にニューヨークで書いた「産児調整」をバスコンセロスが主催する雑誌「たいまつ」(*Antorcha*)に寄稿し、「一言で言えば、産児調整は女性のかんりの物理的悲惨さに終止符をうつことができるだろう。そして、また、メキシコの男性によく見られる倫理的な悲惨さも終わらせるだろう。」と述べている。しかし、公教育省に所属する立場上、ユカタン派を支持することは難しかっただろうと思われる。決議では、「産児調整が社会にとって最も深刻な問題」である事を指摘するにとどめ、その対応を専門家に委ねるとして、産前産後のクリニックの設立を決議した。

経済的問題については、同一労働同一賃金の実施、家事労働者の保護、成

人女性のための職業学校、家政・衛生・育児を学ぶ実験学校の設立を訴えている。女性労働者の子どもの保護では、出産施設、託児所、工場における託児施設の設立、女性に対する保護では、売春、アルコール中毒の撲滅を決議している。エレナ・トレスは、精力的にこれらの決議をまとめた。30日の閉会式では、卓越した事務能力を披露し、閉会演説を行い、会議を締めくくった。

エレナ・トレスは、1924年、国際機関の奨学金を得て、コロンビア大学に留学した。アメリカ合衆国滞在中にも、メキシコ代表として、1925年にワシントンで開催された汎アメリカ大陸女性同盟フェミニズム会議に出席している。この間、終始親交のあったバスコンセロスは、大統領選に出馬するために公教育相を辞任した。同年、カジェスが大統領に就任し、モイセス・サエンスが公教育省の次官として実質的な指揮をとっていた。

サエンスは、コロンビア大学で農村教育を学び、文化伝道団、農村学校を推進した。1926年、エレナ・トレスはサエンスに呼び戻され、メキシコに戻った。1926年に文化伝道団局が設立され、同年1月1日付けで公教育省の農村学校先住民文化統合局所属の視学官に任命されたが、6月30日に文化伝道団を辞任した。5月17日に、高等師範学校文学部の主任教授に任命、7月に教員研修のための国立大学夏季学校の教育学教授になるが28日には退職と、この間めまぐるしい去就をくりかえした。その理由は、1927年に開始したカジェス政権への反対運動であろうと推測される。反カジェス運動は失敗し、1928年にアメリカ合衆国に亡命してミズーリ州の国際学校でスペイン語を教え生計をたてていた。1929年に帰国し、女性を組織してバスコンセロスの大統領選を支援したが、1930年に再びアメリカ合衆国に亡命した。カジェス政権批判、フェミニズム審議会と中央労働組合との確執、バスコンセロスの大統領選挙落選などが、公教育省を追われた原因だったと考えられる。

#### 4. 農村教育専門家そして教育官吏として

1932年2月1日、39歳のエレナ・トレスは再び公教育省で活動を開始した。2月15日に出された辞令によれば、文化伝道団および農村師範学校局任命の文化伝道団派遣教員（maestra de Misión Cultural Viajera）として月収259.30ペソが支給された。1933年3月23日には、女性農村教師と村のための家政科と

民芸品作りのためのラジオプログラムの製作を任せられ、週4つの番組を担当した。1934年1月16日付けの辞令では、家政学の専門家として月給471.46ペソが支給された。同年3月17日には、農業教育および農村師範教育局公務員として、月額219ペソが支給されるという辞令が出ている。アメリカ合衆国で教育を受けた農村教育専門家として公教育省の中での地歩を次第に固めていった様子がうかがえる。

エレナ・トレスが公教育省に復帰した時期に、公教育省を率いていたのはナルシソ・バツソル (Narciso Bassols) だった。バツソルは、農村教育の普及を担っていた文化伝道団が、次第に歌や踊り中心の宣伝機関となったと批判し、本来の姿に変えようとしていた。ちなみに、バツソルは、1925年に設立された中学校に性教育を導入しようとして、直接的には辞職に追い込まれた人物である。バツソルが導入しようとした「性教育」は、衛生教育にすぎなかったが、カトリックの宗教規範の強い当時においてはその名称だけで強い反発を招いた。

1933年に公教育省が開始したラジオ番組では、エレナ・トレスが家政科の授業と話を担当した。村の住民や教師を対象としたもので、ラジオは公教育省が設置した。1回5分で、実験的な意味合いのある番組であり、全国の農村学校に放送による教育を広めようとした。この間、農村教育を担う文化伝道団や教員を対象として情報交換のために、公教育省が発行する月刊誌『農村教師』(El Maestro Rural) において家政学のセクションを担当している。この中で、栄養、料理、衛生、裁縫や刺繍、家庭における女性の役割、家族など多岐にわたるテーマについて論じている<sup>19</sup>。

1934年7月に農村教育局長のラファエル・ラミレスは、農村教育専門チーム (Cuerpo Técnico de Educación Rural) を創設し、専門チームに農民女性を対象とした家政科プログラムの作成を依頼した。公教育省は、農村教育の生活向上のために家政科を重視した。エレナ・トレスはここで中心的な役割を果たし、女性の初等教育の方向付けに影響をおよぼした。エレナ・トレスは、「良い家庭は偉大な国家をつくり、個人が経済活動に責任を持つことは強力な国家をつくる」<sup>20</sup>と述べ、第一に家庭に責任を持つのは女性であると考えた。プログラムは、6～9歳、9～12歳、12～14歳の年齢別に3つに

分けられた。年齢に応じて、それぞれの活動のために教材が選択され、グループで洗濯とアイロンかけ、縫い物、料理、掃除の実習が行われた。家政科は毎日1時間半の授業があり、別に毎週1日が実習にあてられた。エレナ・トレスは小学校にも家政科が導入されるべきだと考えていた。1936年3月21日には、連邦区初等・農村教育全国審議会の常任委員となった。また、1937年1月19日に、都市・農村初等教育総務局の専門職理事に任命された。ここでのもっとも重要な業績は、地方の住民の経済的社会的状況の調査を実施したことである。農村教師を使い、メキシコ州の338村を調査し、そのデータを収集した。データに基づいた農村教育の手引きが、『6週間コースの教育テクニク』(*un libro de técnica a través de un curso de seis semanas*, México, Editorial Cultura, 1937)として出版された。

専門職教員として公教育省に勤務する傍ら、海外でフェミニスト、農村教育専門家としての活動を行っている。1934年9月にチリで開催されたアメリカ大陸教育会議に代表として参し、10月には、ペルー、エクアドル、パナマ、コスタリカの教育機関を訪問し、農村教育とメキシコ女性について講演した。36年には、ベネズエラのカラカスに農村教育の再編のために赴いている。

1939年には、アルマサンの大統領選挙を支援するために、メキシコのカリキュラム調査を実施した。その後、1942年に初等教育視学官、1943年には農村教育審議会の専門職理事、第306区の視学官となり396ペソの月収を得た。その後、1945年に一時視学官の職を離れた以外は、初等教育の視学官として1955年まで教育省で働いた。同時に、UNESCO顧問も務めた。1955年の公教育省での月収は950ペソだった。1921年に公教育省に入って以来、34年間農村教育に従事した。1970年10月19日、77歳で脳血栓のため死亡した。

## 5. おわりに ——エレナ・トレスと農村教育——

エレナ・トレスは、フェミニズム運動においても教育職としても、貧困層の女性たちの側に身を置いていた。グアナファトで生まれたエレナ・トレスは、非有産階級ではあったが社会の最下層の貧困層出身ではなかった。当時の、都市の労働者層は経済発展をとげたディアス政権下での新興の中間層を含み、有産階級ではないが借金に縛られ自由のない最下層の農業労働者層と

比べると、子どもの教育に投資できる程度の経済的ゆとりがあった。当時の女子実業教育を受けた新興の都市労働者層であるエレナ・トレスの闘いは、社会的不公正・不平等への闘いだったといえよう。都市の新興知識層の中心となったのは、教員たちだったが、その給料はそれ程高くはなく、小学校教員でも、生活がやっとの状態だった。新たな社会層としての都市労働者階層出身の女性たちの職業領域は限定され、タイピスト、電話交換手、速記者などの新たに作られた職種で、もっとも大きく安定した労働市場は小学校教師だった。「世界労働者の家」の労働運動や、それまで教育を独占していたカトリック教会に対して欧米の新しい教育思想を導入した合理主義学校運動は、これらの教師たちにより展開された。こうした運動を通じた連帯は、エレナ・トレスを護憲派の人々やユカタンの社会主義者たちと結びつけた。ユカタン社会党での活動を通じて見たアシエンダ農民の生活は、エレナ・トレスが後に農村教育への関心をもつきっかけとなったにちがいない。

バスコンセロスの公教育省の仕事は、エレナ・トレスのキャリアにとって決定的な方向付けを与えた。バスコンセロスは、メキシコ革命後の近代化にとって公教育の普及は国民統合の不可欠の手段と考えた。そして、都市での学校朝食や農村教育のための文化伝道団を創設した。エレナ・トレスは、これらのプロジェクトの実行部隊の一員だった。しかし、文化伝道団の初代責任者にはラファエル・ラミレスが任命された。選挙権もなく、公職が女性に全面的に開放されてはいなかった社会状況の中で、その功績が女性であるがゆえに公教育省のなかで十分反映されなかったのは、想像に難くない。

バスコンセロスは、女性の精神的母性を称揚するガブリエラ・ミストラルをチリから招聘し、家庭学校を設立した。ミストラルは、「愛国心」について、「私にとって、女性の愛国心の形は、母性そのものである。女性に与えられる最も愛国的な教育は、したがって、家族の意義を強調する教育である。」<sup>21</sup>と述べている。母親であるか否かを問わず「精神的母性」をもつ女性は、教職に最も適した存在として、教育運動に導入された。また、「母の日」を学校行事とし、女性の母性の称揚を通じて国民国家に女性を統合した。近代国家を構成する国民を育成する上で、家庭における母親の役割を重視した。この姿勢は、エレナ・トレスの農村教育における家政科カリキュラムの基盤と

なるものである。

都市では、小学校、高等小学校の後の女子教育のために家庭学校と職業学校が創設されていた。1921年に技術教育局が設置され、メキシコ市に鉄道学校、繊維学校、建設教員学校、技術教員学校、実業学校、グラフィック学校、速記学校そして家庭学校が開設された。新たにメキシコ市で開設された13の学校のうち9つは女性を対象とした職業学校だった。また、家庭科の教師に教員資格を付与した。労働市場に女性向きの領域が設定され、同時に家庭という再生産領域の労働内容がカリキュラム化された。さらに農村教育において再生産労働のカリキュラム化を推進する牽引となったのが、公教育省の月刊誌『農村教師』に掲載されたエレナ・トレスの記事やラジオ番組である。『農村教師』に連載された家政科の記事をまとめた『農村教師を支援するための家庭科原理』（Principios de Economía Doméstica para ayudar a las maestras rurales）には、栄養学、調理法、栄養疾患、老人のための食事、掃除、洗濯、手洗いや沐浴を含む衛生知識、生活を向上させる知恵などの内容が書かれている。これらの事項が、家庭の管理者としての女性、母親の役割として明示化されたことの意味は大きい。

エレナ・トレスは、労働運動に加わり共産党結成にも参加したが、労働者としての女性の立場を保護するとともに、女性本来の姿を家庭に求めるという当時のフェミニストの考えを共有していた。むしろ、この考えを積極的に推し進めることにより、近代国家における女性の役割を強固なものにしようとしたと言えよう。彼女自身は、生涯独身で専門職労働者として働き、母親となることはなかったが、その生き方を通じてカトリックの伝統的な女性規範とは異なる「精神的母性」の具象化を果たしたのかもしれない。

本研究は、科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号18530665）（平成17年度～19年度）「メキシコの近代公教育形成過程における教育のジェンダー化」の助成を得て行った。



## 注

- 1 狭義のメキシコ革命は、ディアス独裁政権に対する反再選運動が組織され各地で武装蜂起が始まった1910年から、メキシコ共和国憲法が制定され武力をもちいた諸勢力の衝突が収束を見た1920年までとされるが、広義には1920年以降のオブレゴン、カジェス、カルデナスらの大統領の下での1940年までの国家再建期を含む。
- 2 護憲派のカランサ大統領の秘書として、17年憲法や民法改正における女性の地位向上に影響力をもった。フェミニズム雑誌『現代女性』を発刊し、女性参政権を要求した。カランサ大統領の死後は、政界から遠ざかった。1953年に初めて女性に参政権が与えられたのはじめての選挙で、メキシコ初の女性議員となった。
- 3 ユカタン州知事フェリペ・カリージョ・プエルトの妹で、ユカタン州のフェミニズム運動を率いた社会主義フェミニスト。詳しくは、松久玲子「エルピア・カリージョ＝プエルト—社会主義フェミニストのさきがけ—」、加藤隆浩、高橋博幸編『ラテンアメリカの女性群像 その生の軌跡』、行路社、2003年、169 - 183頁参照。
- 4 Ramírez, Aurora Tovar, *Mil quinientas mujeres en nuestra conciencia colectiva, Catálogo biográfico de mujeres en México*, Documentación y Estudios de Mujeres, A.C., México, 1996.
- 5 Cortés Ramírez, Noemí, tesis “*Elena Torres Cuellar. Revolucionaria Feminista y Educadora Mexicana*”, archivo en la Universidad Iberoamericana, 1990.
- 6 Macías, Anna, *Against All Odds, The Feminist Movement in Mexico*, Greenwood Press, London, 1982. Jaiven, Ana Lau, *La Nueva Ola del Feminismo en México*, Planeta, México, 1987. Tuñon Pablos, Julia, *Mujeres en México, una historia olvidada*, Planeta, México, 1987. Cano, Gabriela, “Las mujeres en el proyecto educativo de José Vasconcelos (1920-24)”, Signos, Dept. De Filosofía, UAM-I, 1991, p.265-275. Tuñon Pablos, Esperanza, *Mujeres que se organizan: El Frente Unico Pro Derechos de la Mujer 1935-38*, Porrúa, México, 1992.
- 7 INEGI, *Cien Años de Censos de Población, 1895-1990*, México, 1996.
- 8 Bazant, Milada, *Historia de la educación durante el porfiriato*, El Colegio de México, México, 1993.
- 9 Loyo, Engracia, *Gobiernos Revolucionarios y Educación Popular en México*, El Colegio de México 1911-1928, México, 1999参照。
- 10 ディアス時代の軍部エリートを代表するウエルタ将軍による反革命運動は、多様な革命勢力を反ウエルタ運動にまとめる働きをした。内乱状態の中で、北部諸州の自由主義勢力を結集して護憲派勢力としてコアウイラ州知事のカランサを中

心とする勢力がウエルタ反革命政府を打倒した。護憲派勢力とは、この1857年憲法を擁護する自由主義勢力をさす。ウエルタ政府が打倒されると、再び革命勢力が分裂し激しい内戦へと発展するが、カランサ派が国土のほぼ90%を支配下におさめ、1917年に革命憲法を制定する。

- 11 松久玲子「メキシコ革命期のユカタンにおける女子教育とフェミニズム会議」『言語文化』（同志社大学言語文化学会）第8巻第2号、2005年12月、229-259頁参照。
- 12 *Congreso Feminista de Yucatán, Anales de Esa Memorable Asamblea*, Mérida, Talleres Tipográficos del Ataneo Pninsular, 1916.
- 13 Cano, Garaciela, Cano, Graciela, 1984, *La Huelga Magistral de 1919*, Tesis, UNAM, México, D.F. 40-48頁によれば、1919年において首都圏の幼稚園、小学校、高等小学校、夜間学校の教員のうち男性28%、女性は72%を占めていた。憲法123条で同一労働同一賃金が定められていたにも関わらず、女性教員は賃金面でも差別を受けていた。
- 14 Cortés Ramírez, Noemí, *ibid.*, p.31.
- 15 1921年の統計（Dirección General de Estadística. IV Censo General de Población. 1921）によれば、10歳以上の成人人口の65%が非識字だった環境で、メキシコの国家アイデンティティと国民文化を形成をめざし、壁画による歴史教育を実施した。リベラ、オロスコ、シケイロスなど後に壁画運動の三大巨匠といわれるようになる画家を雇用し、公教育省や保健省、美術学校などの公共建造物の壁にメキシコの歴史や古代からの人々の暮らし、メキシコ革命のテーマを描かせた。
- 16 Cano, *ibid.* P.42
- 17 Dirección General de Estadística V. *Censo General de Población 1930*.
- 18 *Primer Congreso Feminista de la Liga Pan Americana de Mujeres, Conclusiones y discurso de clausura*, Talleres Linotipográficos “El Modelo”, México, 1923.
- 19 これらの記事は後に、Elena Torres, *Principios de Economía Doméstica para ayudar a las maestras rurales*, SEP, Méxicoにまとめられている。
- 20 *La Antorcha*, No.10, 1924.12.6
- 21 Mistral, Gabriela, *Lecturas para Mujeres*, Editorial Porrúa, México, 1997.

## Elena Torres Cuellar, educadora y feminista de la época revolucionaria en México.

Reiko MATSUHISA

Elena Torres Cuellar nació en Guanajuato el día 23 de junio de 1893. Pertenece a las clases desposeídas, sin embargo, no al estrato más pobre de la sociedad. Después de graduarse de la escuela primaria, empezó a trabajar a la vez que estudiaba el curso de oficios para mujeres. El número e importancia de las trabajadoras de la ciudad como Elena Torres era cada vez mayor desde el Porfiriato, sin embargo, en aquel tiempo era muy limitado el mercado laboral. Los trabajos que les ofrecían eran de mecanógrafas, taquígrafas, telefonistas y maestras. El mercado laboral más grande y estable fue el de maestras.

Desde 1921, Elena Torres empezó a trabajar con el Secretario de Educación Pública Vasconcelos, quien consideraba que para modernizar México era indispensable integrar a la nación y el mejor medio para lograrlo era la generalización de la educación pública. La SEP estableció los desayunos escolares en las ciudades y las misiones culturales para la educación rural, en las que Elena Torres tuvo gran responsabilidad. Gabriela Mistral de Chile dijo que, fueran madres o no, las mujeres tenían la “maternidad espiritual”, por eso las mujeres eran aptas para el trabajo de maestras. Vasconcelos quien reconocía la importancia de la maternidad invitó a Gabriela Mistral a fundar la Escuela del Hogar en México. Vasconcelos decidió que se celebrara “el Día de la Madre” como ceremonia escolar e integró a las mujeres al movimiento educativo.

Basándose en las ideas de Elena Torres sobre la educación rural se le dió importancia al rol de la madre en el hogar para formar al pueblo del México

moderno. En las ciudades se fundaron las escuelas del hogar y las escuelas de oficios para mujeres en las que se estudiaba después de graduarse de la escuela primaria y superior. La SEP certificó el título de maestra de economía doméstica. En el mercado laboral se reservaron ciertas areas para las mujeres, tales como costura, cocina, boradado, etc. Esos cursos fueron ofrecidos en las escuelas de oficios. También en la escuela del hogar se establecieron programas de enseñanza que incluían trabajos domésticos tales como lavar, planchar, limpiar, y preparar los alimentos, etc. Es decir, los trabajos necesarios para la reproducción del hogar.

Para mejorar la vida rural, Elena Torres realizó un curso de economía doméstica a través de un programa de radio y escribió artículos en la revista para maestros rurales *El Maestro Rural*. Su libro *Principios de Economía Doméstica para ayudar a las maestras rurales* contenía los alimentos y sus valores nutritivos, hablaba sobre los problemas de la alimentación, limpieza, cocina y aseo personal, y daba sugerencias para mejorar la vida, en otras palabras definía lo que debía hacer una madre para mantener un hogar sano.

Antes de hacerse funcionaria de la SEP, Elena Torres participó en el movimiento de “La Casa de Obrero Mundial” y en el de las escuelas racionalistas que introdujeron en México las ideas europeas modernas sobre educación y se contraponían a la educación católica tradicional. También realizó actividades con los Constitucionalistas y los del Partido Socialista de Yucatán. En Yucatán fundó la escuela Montessori y participó en los dos primeros congresos feministas de México. Contribuyó a la organización del partido comunista y trató de proteger a las obreras. Estaba en contra de la desigualdad y de la injusticia social.

A la vez ella compartía la idea que tenían otras feministas de aquel tiempo, de que el mejor lugar para las mujeres era el hogar. Elena Torres promovió esta idea de género a través de la educación y fomentó que las mujeres se vincularan a la nación. Elena no se había casado ni había sido madre. Ella era una funcionaria de la educación, y a través de este trabajo,

concretaba su “maternidad espiritual”, que es diferente a la idea de la figura femenina católica tradicional.